

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第157号

令和5年2月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

大東市北條にあった四條畷神社の“御旅所”

正行の死地を示す“ハラキリ”字地

＝ 大東市立北条人權文化センター「原風景 北條」発刊 ＝

昨年6月20日、大東市立北条人權文化センターから「小説 昭和時代にタイムスリップ 原風景 北條」(A4版・170頁)が刊行された。

北条人權文化センターがこの冊子を編纂した理由は、“昭和の北條を後世に伝えておくべきと考えた”からで、証言を基にまとめたこの冊子は史実ではあるものの、証言に推測や所感が加わっていることから、あえて史実ではなく「小説」と位置付けたと、取材・編纂にあたった比嘉政弘氏が記している。

そして、11章からなる章建ての中で、最も多い重複は「四條畷の戦い」で、その理由は「四條畷の戦い」を語らずして北條は語れないからだ、と書いている。

扇谷も比嘉氏から取材を受けたので、その部分を含め四條畷の戦いに関する箇所を以下に紹介する。冊子本文より転載。

ハラキリ字地は、四條畷神社の御旅所

「今井君、こんな詩を知っているか ♪かへらじと かねて思えば 梓弓 なき数に入る 名をぞとどむる」～

略～「北條に『御旅所』というものがあってなあ、その近くに『ハラキリ』という小字があるが知っているか？」

小説
昭和時代にタイムスリップ
原風景
北條

大東市立北条人權文化センター

～略～

「父、楠木正成が湊川の戦いで戦死した後、成長した子、正行(まさつら)と北朝、足利軍との間で戦いが始まる。正行が父の遺言に沿って正統な(後村上)天皇をお護りするために北朝軍(足利方)と戦った彼の有名な四條畷の戦いである。

四條畷市南野にある別格官幣社四條畷神社は正行を主祭神として楠一族を祀るために、明治23年に創建されたものであるが、何故四條畷神社が菊の御紋を冠した『別格官幣社』なのか。実は、南朝を倒した北朝の足利勢が擁する天皇に対して、楠木正成(父)が、正統な天皇であると確信する天皇をめぐって対立し南北朝が争うことになる。これが南北朝の戦いである。南朝(楠木方)は破れて賊軍となり、楠木家は衰退した。しかし、明治時代になって政府が見直した結果、南朝こそ正統な天皇と云うことになり、楠木一族は天皇を支えお護りしたということで、いわば再評価されて、楠木一族は正統な天皇の忠臣であり、その忠臣を祀る社だからその社も『別格官幣社』の冠が付いたということになる。四條畷神社に菊の紋が輝いているのも後醍醐天皇を正統な天皇として御護した楠木家を後の明治政府が厚遇した証である。

故に四條畷神社は、正行軍一行が自刃した北條にも御旅所を設け、弔ったのである。この付近を小字ハラキリといった所以だ」

正行の死地は、枚岡か北條か

「正平3年1月5日、6時間にも及んだ『四條畷の戦い』は、野崎、北條が中心(激戦地)で、四條畷市域で

の戦いは、正行自刃後、和田賢秀の部隊のみが南野に陣を敷く高師直の本陣に突っ込んで賢秀が最期を遂げたところと認識していましたが、南野や中野辺りも正行・賢秀ともども入り込んでの激戦地であったことは、先生の講座で理解できました。ありがとうございました。ところで核心部分、つまり、正行・正時兄弟が相刺した場所を教えてください。北條踏切の辺りの字ハラキリといわれていたところと考えていいでしょうか。」

扇谷先生は次のような見解を述べている。

「正平3年1月5日、早朝に河内往生院を発した正行軍は野崎で最初の戦いをして敵を撃破します。次に北條で衝突(2期)しますが正行軍は後陣が崩れ多くの兵を失ってしまいます。それでも正行軍は北進し南野に構える敵陣に向かいます。師直が陣取る本陣に大将師直がいることを事前に察知していました。本陣は四條畷中野の地です。師直軍は少数の正行軍を侮っていたのか戦意は薄かったようです。そこへ、正行は師直めがけて突進した。『師直の首を討ち取った!』しかし討ち取った首は師直ではなかった。偽首だった。どうやら敵陣も警戒していたようだ。

正行はここで挙げた師直の偽首に落胆するも態勢を立て直そうと四條畷中野から北條方面へ向かって退却し始めた。

現在の四條畷高校当り(雁屋)に差し掛かった時、敵の弓矢隊が待ち伏せていた。正行、正時をはじめ正行隊は無数の矢に打ち崩れてしまった。『もはやこれまでか』深手を負った正行軍は退却することになります。そして、正行、正時は死地を求めてさ迷い歩いたものと思われま。当時の雁屋から津の辺にかけては、深野池の周辺にあたり湿地帯であったと思われることから、ご指摘のハラキリ字地は権現川沿いの堤にあたり、周辺よりも少し高い位置にあったと思われることから、この地を楠軍最期の地と選び、正行兄弟二人は相刺し違えて亡くなったものと思われま。

矢を受けた位置から南にかなり離れていますが、江戸時代に書かれた河内名所図会の正行墳を見ましても、当時、この辺りに民家らしきものはなく、ススキや葦などが覆い茂っていたものと思われまから、適地(死に場所)を捜し、死力を尽くして歩いたのではないかと考えてります」

(雄一) 枚岡説についてですが、幼少時を過ごしたといわれる往生院が正行の本陣だと言うのは、東西異論のないところだと思いますが、同時に正行が出陣に際して身を浄めた井戸や戦いのもと思われる武具などが出土されたり、古くから『四條』や『縄手』の地名があれば、枚岡の住民が、四條畷の戦いや正行の最期が枚岡だとす

る説が消えないのも無理からぬことだと思います。このこと(枚岡説)について、先生はどう考えていますか?

扇谷先生は雄一の質問に次のように見解を述べている。

「結論から申し上げれば、一つは、十念寺再建時の勧進帳木版に記されているように200年の長きにわたって正行軍の悲惨な戦いの様子が地域の人々に語り継がれていたこと。二つには、大東市古戦田字地、四條畷市中野と雁屋の2か所に古戦田字地、そして大東市津の辺にハラキリ字地が残っていることから、四條畷の合戦は大東市から四條畷市にかけて行われたことは明らかだと思います。

枚岡神社の首洗いの井戸のことですが、“首洗い”と言われてきたことで、正行が負傷後傷を洗ったとの誤解が生じたと思います。

正行は、往生院を出陣した後、枚岡神社に立ち寄り、<身を浄め(首を浄め)>四條畷に向かったのです。枚岡神社でも最近、『首洗いの井戸』の呼称を『正行ゆかりの井戸』に改めています」

平尾兵吾(筆者追記:兵吾)先生の見解と同じことを扇谷先生も主張。正行の死に場所が北條であることにさらに確信を持つに至ったのである。

3月4日、第9回楠正行シンポジウム開催!

第9回楠正行シンポジウム

スクリーン映像で届ける正行の生涯!そして外国人の見た小楠公像とは



届けるこの矢

輝ける日本へ!

楠正行

くすのきまさつら

ところ 四條畷市立教育文化センター

とき 令和5年3月4日(土) 午後2時~4時

1部 映像スクリーン紙芝居&絵本

【紙芝居】
「楠公父子」昭和19年制作
「くすのきまさつらからた 正行の生涯」平成30年制作

【絵本】
「学び」 まさつらくん
「恋」 正行 恋物語
「情け」 渡辺橋の美談

2部 基調報告 外国人の見た小楠公像

発表 扇谷 昭(四條畷楠正行の会代表)

平成27年3月16日、扇谷は埋もれていた稲葉若山編『朱舜水全集』第17巻に載る楠正行像を国立国会図書館関西館で発見しました。果たして外国人、朱舜水の見た小楠公像はどのような内容だったのでしょうか。この楠正行像を読み解きながら、詳しく解説します。

応募方法 募集50名/先着申込制 窓口&お電話
四條畷市立教育文化センター ☎ 072-878-0020
〒575-0021 四條畷市南野5-2-16

参加費 ¥300円(当日、会場で徴収)

主催/四條畷楠正行の会
後援/四條畷市・四條畷市教育委員会・四條畷神社

続・四條畷で
蘇る正行ワールド